

## V-5

## CD20 陽性、t(11;14)(q13;q32)を有する多発性骨髄腫症例の臨床的特徴

鈴木憲史、阿部 有、林さやか、森 有紀、中川靖章、鈴木利哉、松田 功  
日本赤十字社医療センター血液内科

CD20 陽性の多発性骨髄腫は小型骨髄腫細胞が多く、80%以上に 11;14 転座を有し予後は一般に 不良という意見と、染色体正常群と同程度で予後良好群との意見の相違が見られる。(Blood102:1070;2003、臨床血液 46:1293,2005)。「方法並びに結果」1997 年からの 10 年間で当院において 168 例の G-バンド法染色体分析の結果、11;14 転座を有する骨髄腫は 9 例で 11;14FISH 陽性例の 9 例と合わせて 18 例を検討。その頻度は骨髄腫症例全体の約 10%強：発症年齢は 50-88 歳で平均 70.6 歳とやや高齢者に多く、男女比 5/13 と女性に多い。IgG 型 9 例、IgA 型 4 例、BJ 型 5 例と亜群の偏りなく、A 期 7 例、A 期 9 例、B 期 2 例と進行期の診断が多い。病初期からリンパ球減少などがみられ敗血症で早期死亡した 3 例以外でも AML に移行した 54 歳例など治療抵抗性な症例が多い。しかし、形質細胞性白血病の傾向を示した 2 例のうち 1 例で自家末梢血幹細胞移植後 20 ヶ月生存例などをみても同移植の有効性が示唆される。FISH のみで 11;14 転座を示し G バンド正常な 75 歳女性例で 121 ヶ月の生存がみられ、FISH 単独の異常と染色体異常での予後予測には注意が必要かと思われる。

「結語」当院の CD20 陽性・11;14 転座症例は予後不良であるが、自家末梢血幹細胞移植や、骨髄腫幹細胞にも作用しうる可能性のあるリツキシマブ投与の有効性が示唆される。骨髄腫治療のターゲットである骨髄腫幹細胞は全骨髄腫細胞の 2 - 5%であり、William Matsui らの報告によると CD138 陰性で CD19,CD20 陽性分画にあるといわれている(Blood.2004;103:2332)。培養系ではリツキシマブと補体により強い増殖抑制がかかる。臨床例でも骨髄ストローマ細胞との接着を離すなどの工夫により十分な効果が期待される。多施設共同臨床第 相試験として、CD20 陽性・11;14 転座症例を集め、予後の改善を目指した IDEC-C2B8(リツキシマブ)単剤隔週 8 コース投与の治験が来年 3 月で終了するが、症例登録が極めて遅れている。残り 5 ヶ月で各治験施設とも症例の洗い出しをお願いしたい。本研究会からの新知見を発信したい。

\*Key words ; t(11;14)、CD20、リツキシマブ、予後